

官女

長唄

全詞章

作詞者・作曲者・初演年不詳

平家物語・源平盛衰記による修羅物

見渡せば柳桜に錦する

都はいつか故郷に、馴れし手業の可愛らし

こちの在所はナ、ここなここな、この浜越えて、あの浜越えて、ずつとの下の下関

内裡風俗あだなまめきて

小鯛買はんか鰹買やれ、鰈買はんかや、鯛や鰹、これ買うてたもいのう、アアしよんがいな

いかに身過ぎぢや世過ぎぢやとても、おまな売る身は蓮葉なものぢやえ

徒歩はだし、そなた思へば室と八島で塩やく煙、立ちし浮名も厭ひはせいで

朝な夕なに胸くゆらする、楫を絶えてやふつとりと、たよりなぎさに捨小舟

心づくしの明暮に、乱れしままの黒髪も、取上げてゆふかね言の

生田の森の幾度か、思ひ過して、恥かしく、顔も赤間が関せかれては

枕に寒き几帳の風も、今は苦洩る月影に、泣いてあかしの海女の袖

いつ檜扇を松の葉の、磯馴小唄のひとふしに

友のぞめきにそそのかされて、船の帆綱をかけぬが無理か、須磨よ須磨よ

いとど恋には身をやつす、夜半の水鶏を砧と聞いて

たてし金戸を開けぬが無理か、須磨よ須磨よ

怨みがちな床の内、憂やつらや

波のあはれや壇の浦、打合ひ刺違ふ船戦の駈引、浮き沈むとせし程に

春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れ居る鴟

関の声と聞えしは

浦風なりけり高松の、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける